

● 高澤良一 第七句集 宿好

● 四月―六月

接骨木の芽の付き方は唯杜撰

足出して生けるしるしをだんご虫

はげちよろの蜷の尻のすまし汁

土筆土筆ガウディーの塔ここに建つ

馬刀突きといふ捕物に似たるもの

やどかりの新しがり屋宿替えぬ

増上寺総門前の植木市

つかぬこと伺ひますがと連翹越し

初桜風来れば又そはそはと

つくづくとさくら花満ち日に重る

腕によりかけてこれより糸桜

夕桜すつと色調落しけり

夜桜もぼんぼりの灯もほたほたと

夜桜の雪洞尽きるところまで

日永の亀首伸ばす方何ぞある

こんなにも亀がゐるとは日永の池

泳ぎ来る亀を亀見て日の永し

帰るさも日永の亀の甲羅干し

山道のここにどっこい蝮蛇草

年々にたちつぼすみれ淡きかな

岨道に六方踏むやぶれ傘

芽吹くなら櫛パッパとパッとな

階に池に落花の選り好み

やぶれ傘傘さしきればつまらなき

やぶれ傘臺が立つとはこんなもの

土筆ぽかんとしてゐるうちに命日過ぐ

風はたと絶えし桜の日に重る

踏青の三時となれば風冷え来

芽吹く山見てゐて画法朦朧体
ネクタイをして花見とは上野山

この人のかうゆう句が好きさくら時
相模野の青きを踏み来て手ぶらかな
亀鳴くを聴くとておかしからぬ齡

駒返る草定年を前にして

合いの手に潮騒浜の三味線草

歩く会雨天決行チューリップ

出来れば近場妻との花見何處にせん

漫然と櫻は芽吹き初めにけり

御忌御忌と鳥啼けるなり増上寺

真つ白な花に群がる風一目

一滴の雨にも遇はず初ざくら

なかなかの櫻と幹に手を掛けて

福島は桃桃の花霞

東北行

落花ひとひら二本松少年隊

角館郵便局の糸桜

北国の餅肌いろのさくら咲く

花辛夷飛び込んでくる田沢湖線

鳥雲「解体新書」挿絵画家小野田直武に直武描きし人體圖

ほくり咲き秋田支藩の武家屋敷

まんずまんず寄ってたんせとタラの芽売る

もくもくと花冷えどきの樺細工

ひゅうと手が伸びて編み込む通草蔓

落雁売茶っこさのんでいけといふ

鈴木内川高堤いま花堤

花堤万の蕙を敷き詰めて

いぶりがっこキザミがっこに花の昼

川沿ひにセスナ機飛んで花見時

水芭蕉田沢湖水に萎ゆ花横たへて

山毛櫨描くコンテさくさく雪間どき
雪割れの雪を山毛櫨の根受け止めて
人間にくびるゝところ雪間の温泉
山蛙聞き駘蕩として長湯
石割石割桜のえらい桜を一目見ん
朝の気の漲る石割桜是
枝張りも根張りも石割大桜
あれまあと石ぶち割って咲く桜
ものの芽も盛岡弁ももそもそと
呆けをる土筆と待てる釜石線
陽炎を搔き分け搔き分け釜石線
膝を詰め遅日の遠野物語
土筆つぐす生えコンセイサマの石ほとり
泥鰌どんじよ捕りザシキワラシも加はりて
青蛙あおびつき遠野に雨をもたらせり
横柄な遠野鴉に畦青む
田起しの小田の畦草なまなまと
カッパ淵遅日の祠一つ置き
カッパ淵杉菜の青を流しけり
永日の河童に逢ひにカッパ淵
遠野の子手っこつないですかんぽ道
語り部の火箸叩いて締めくくる
曲り家の三和土伝ひて昼蛙
ひつつめに腹のぬくもる夕蛙
対岸割烹の花を着に枕流亭
さくら時堤ゆく人豆粒大
堤より花の散り込む遊び舟
落花踏み歩む堤よ北上よ
北上川の朝の水勢さくら満つ
花巡りホテル今日の泊りは武蔵坊

高館の落花しづしづ静の舞
清衡中尊寺が夢みし花の仏国土
繽紛と飛花の舞方衣川
たそがれ毛越寺の光帯びつつあめんぼう
来てみれば雀隠れの衣川
衣川やいのやいのと代蛙
たんぽぽに村内放送よく通る
一夜荒れ濁りのとれぬ代田水
毘沙門達谷窟天蝦夷えみしに睨み利かす寺
悪路王籠りし達谷窟おぼろ
悪路王此処に討たれぬ大馬陸
唇の分厚き日永の磨崖仏
達谷の岩屋へやぶれ傘の道
花は楚々岩は恢々巖美溪
溪底の甌穴に飛花あやまたず
発送須賀川の牡丹苗木は横浜まで
牡丹に寄す侍従長筆大御歌おおみうた
春先の牡丹の手入れもくもくと
牡丹守この須賀川の地味を云ふ
薬用としての牡丹の在来種
祖牡丹おや撰津の國より持ち込みて
すっぱりと芽二つ残し牡丹剪る
風嫌ふ牡丹の葉剪り大切と
牡丹は剪らねば剪ればよき花を
牡丹の手入れ総勢二十名
磊落な榊の落とせる春落葉
魁さきがけの一花百花の気概もて
階きざはしの壁を見上げて蟻の居り
蟻蟻と見遣るその先亦も蟻
大風に吹き曲げらるる蟻の道

山門の蟻に見限りつけ小昼
亀の子は首から泛かむこと覚え
水馬試し走りの朝の池
ホバリングする虻に貌突き出して
方向をくるりと転じ虻の尻
紫木蓮江ノ島周辺酣なりしがそれも散り
紫木蓮滝ノ口にも腰越にも
腰越状したためし地の諸葛菜
階きし攀はず足許を見て椿見て
岩置蟹追いかけて追いかけて
抱一奥津宮の亀に鳴かれて島巡り
鳶のこゑ島の椿を真つ赤にす
島の著莪活けて茶店の富士見亭
追ひやれど膝にまたくる島の蠅
砂浜に足投げ出して日永人
春陰の大明竹たいみんちくに噎カッびゆく
蝸牛化シテ蛞蝓カットナラン今日カラハ
グラビア版カレンダーあり裸婦と薔薇
剪り取りてヨハネの首のごとき薔薇
一政の龍三郎の得手の薔薇
晩年を薔薇に腐心の老大家
一政の心頭の薔薇真くれなる
けふと踏む予感当りて薔薇崩る
この森の貴公子楠の若葉せり
ヒトゲノム解説せよと亀鳴けり
葉ざくらの葉末までゆきわたる風
絮たんぽぽ肺活量ジヨージ・ゲロス回顧展は人並み以下
ハイル・ヒトラー！鷲ペンで描く髭薄暑
日傘して次に浮き来る亀を待つ
甲羅干しなどして亀の子亀之助

萍に鎌倉の昼深きかな

蓮丸葉ついと流るる風起ちて

著莪に雨たうたう来たねとご住職

傘行き交ふ紫陽花のたらたら坂

哲学を旧西田幾多郎宅此処に深めぬ雪の下

擬宝珠の茎をすりと雨滴馳せ

あぢさゐのぼろんと零す雨滴かな

柄の大きかうもり傘より梅雨霽

江ノ電はゴトゴトと来ぬ梅雨枕木